

Please return to: Elma

regards: Amy

✕
 作品の中にこそ神様は宿る。それが彼の口癖だった。
 私達人間の中では決してなく、人間の生み出した
 作品の内側にしか存在出来ない。

神様の宿った作品は数多存在すれば、

神様の宿った人間なビーも存在しない。

だからこそ今の届かない位置にまで行ってしまったものを、
 私達は崇めるように触れるのだと。

今は覚えている。雨の伝う窓辺で指先を滑らすようにして
 日記帳の背を撫でる彼。

彼はいつだって思い込みの中を生きていた。

それでもエイミー、貴方の残した作品を大切だと思えば、
 貴方に変えられるものと無さうに思う。

小魚が先程に蛙を閉じ込めてしまったように、

少しだって漏れ出さぬよう入口へと栓をする。

絶えず逃げ出そうとする思い出を見過ごすなど出来ない。

そしてそれは決して作品を想うてのことなんかじゃない。

貴方を閉じ込めるためだ。

作品の中にこそ神様が宿る。

そんなことあの頃の私にはどうでも良かった。

私にとっては今でも、貴方がこそが神様に近い。

3/14

フランクフルトから東へ向かう鉄道の中で、車掌から
パスポートの提示を求められた。

旅行鞆から取り出して見せながら、

国境を越えていたことに気付いた。座席の後部から

耳慣れない異国の言語が聞こえる。

様々な人種の詰め込まれた車両の外側に、

潮風に揺れる新緑が見え隠れしている。

9/5 夏-乗

湖の底にいたみたいた
呼吸のうつかり喉に絡んだ
気泡を吐き出して数秒、や、と足が着いた
柔らかな泥の感触がした

ずっとずっとずっとずっと
君を追っているだけで

どうしようもないことばかり言いたかった
睡蓮が浮いていた 水圧で透明だ
もう塵気楼よりも確かならそれでいいよ
適当でも……から 目的とか……から
このまま何処でも……からさ、逃げよう

湖の底にいたみたいた
濡れる鼓膜がくすぐった……んだ
期待も将来も明日も向も聞きたくなかった
口から溢れる泡が綺麗で

ずっとずっとずっとずっとずっと
見惚れてしまっただけで

心より大事なものを見つけたかった
言葉って薄情だ 水圧で透明だ
なあ、建前より綺麗なものを探してるんだ
そんなの忘めて……からさ、逃げよう

こんな自分ならいらない 僕には向にもいらない
お金も名声も愛も称赞も何にもいらない
このまま遠くに行きたい 思いの外に触れた……
また君の歌が聴きた……

ずっとずっとずっとずっとずっと
君を追っているだけで

どうしようもないことだけ歌いたかった
睡蓮が浮いていた 水圧で透明だ
もう塵気楼よりも確かならそれでいいよ
このまま何処でも……からさ、

本当は全部置いてただ逃げ出した……だけだった
人生は透明だ 水圧で透明だ
もう塵気楼よりも確かならそれでいいよ
適当でも……から 目的とか……から
このまま何処でも……からさ、逃げよう

3/21

マルメからランドへ。彼の書いた手紙には学生の街と書かれていた。北欧の春は思うよりずっと肌寒い。この街を彼が歩いたのか。街の端、小さなホステルの一室を借りた。

今は壊れ落ちそうなバランタで彼の残した手紙を読み返している。今では日課に近い行動だった。

部屋に戻り、これまでを手帳に書き付ける。

私は怖い。彼と過ごしたあの日々が、少しずつ頭の箱から漏れ出していくのがわかる。

目を追うごとにそれは加速する。

脳の容量から漏れた思い出が、底に空いた

小さな穴からすり抜けていく。日記をつけなければいけない。

せめて書き切れる部分だけでも。

3/22

彼が写真に撮って残していた場所はすぐに見つかった。

中央駅から出て南側の広場。

そして、ランド大学近くの民家の外壁。

古びた建物の屋根から頭を覗かせる。

大聖堂が見え隠れする。

3/22 夕風、某、花惑い

夏になる前にこの胸に散る花火を書いた。
夜が来るから明後日の方ばかりを見てる

口に出して一回 八月某日を書いて出して
僕には言い足りないことばかりだ

ギターを鳴らして二小節 この歌の歌詞は380字
ロック=ロールを書いた あの夏ばかり歌っていた

さよならだけじゃ足りない
君に苦差す日々の歌を
思い出すだけじゃ足りないのさ
花泳ぐ 夏を待つ 君は言葉になる

忘れないようにあの夏に見た花火を書いた
思い出の僕ら、夜しか見えぬ幽霊みたくだ

何にも良いことないんだ
この世は僕には難解だった
君が教えたかったことばかりだ

ピアノを弾いてたホール
あのカフェももう無いんだ
僕らを貶す奴らを殺したい
君ならきっと笑ってくれる

このままじゃまだ足りない
僕ら花惑う風の中を
思い出すほどに苦しいのさ
夏が来る 夢を見る
心に穴が空く

唄歌うだけじゃ足りない
君に苦差す日々の歌を
美しい夜が知りたかった
花惑う 夏を待つ僕に差す月明かり

3/23

レイド大聖堂。街の心臓部にある、12世紀に建てられた
ロマンス様式の教会。高い天井。キリストの祭壇画。

中央に据えられた石台。パイプオルガン。

天井に吊るされたシャンデリアと蝋燭の灯り。

整列するように並べられた椅子。地下空間。

柱にしがみ付いた、伝承に残る巨人の像。

エイミーが手紙に書いていた天文時計を眺める。

聖堂端の木製の椅子にもたれて、彼を真似るように

詩を書く日々が続いている。

彼と出会った時のことを、この頃よく思い出す。

祖母の家へと向かう途中、急な雨から逃れる為に寄ったそこで、
彼は熱心に何かを書いていた。木製のテーブルには
小さな皿とカプチーノが置かれていて、湯気の上うな
様子を見るに冷めるくらいの時間が経っていることが
想像出来た。それを押しのける様にして白いスリフが置かれ、
端を止めるための消しゴムが立っていた。

彼の目はずっと下を向いていた。まるでそこにこの世の
真理が描き出されるとでも言うかのように紙をじと睨み、
幾度も鉛筆の尻で机を叩いた。そして思い出したかのように
筆を走らせると、息をつく間も無くまた紙を睨んだ。

少し離れた席で私は手持ち無沙汰にテーブルの木目を
なぞっていた。大粒の雨は中々止む気配を見せず、
持っていた鞆にも特に暇を潰せるようなものは
入っていなかった。

そうしてぼろとしているうちに、彼は長い間筆を
続けた手をようやく止めて鉛筆を置いた。
気になって横目で見ると、彼はその書き上げた一枚を
何故かぐしゃぐしゃと無造作に丸め、トラスに設置された

扉入本へと放り込んだ。そして隣の鞆に手を突、込むと、
皮の手帳と万年筆、そしてインク瓶を取り出すと、
また熱心に何かを書いた。
今度は手は止まらず、つかえることもなくずらずと書き終えた。
たった今書いたものを早すような、
作業的な郵きだった。

流石に集中も切れたのか、彼は筆先を眺めながら
テーブルに上半身を伏せた後、目を閉じ、
そのままひくりとも動かなくなった。

小粒の雨が疎らに屋根を鳴らす音が、
トラスを静かに満たしていた。扉入本の縁から
溢れるように落ちた紙が一つ、風に吹かれて転がり、
少し離れた座っていた私の足元にまで辿り着いて止まった。

彼は突っ伏したまま動く気配もなかった。

何を思っていたのかは覚えていない。

その時、私は静かに床へ手を伸ばすと、かきらめた
紙を指先で持ち上げて机まで引き上げた。

中には一遍の詩が書かれていた。

A5サイズ(ほどの)レズリーフに詰め込まれるようにして、
 殴り書いたような様相で、文字連は静かに整列していた。
 その頭上には簡易的な記号が添えられていた。
 無知な私にもそれが音楽を示すことは理解できた。

カタンと椅子の擦れる音がして我に返った。
 慌てて紙を膝の上に置いて顔を上げると、彼は体を起して、
 何かを言いたげに此方を見ていた。

私は覗き見をしたようなおツの悪さを感じて、
 目を逸らして俯いた。雨はいつの間に、薄く静かになった。
 濡れた床板から初夏の匂い立ち上っていた。

エイミーと出会ったのは雨の滴り落ちるカフェラスだった。

4/5

北東へ向かう途中、鉄道の不見合から途中の街で
 宿泊することになった。ヨンショーセンというらしい。
 この国第二の大きな湖の南にある、静かな湖畔の街。
 白夜から中々沈まない夕陽を眺める。砂浜に座って、
 湖の風を浴びる。

松尾芭蕉は俳諧は三尺の童にさせよ、という言葉を書き
 遺したらしい。彼の半紙に書いてあった。

芭蕉のことを調べるうちに、私は与謝蕪村を書いた
 本に行き着いた。この俳人は芭蕉に影響され俳句を書いた。
 蕪風回歸、つまり芭蕉の句風にそが正道なのだと
 説き、芭蕉に倣って生きた。
 いっしか、彼の旅した道を辿るほどに。

9/3 雨とカマ4-1

灰色に白んだ言葉はカマ4-1みたいな色してる
言い訳は...よ 窓辺に置いてきて
数え切れないよ

灰色に白んだ心はカマ4-1みたいな色してる
言い訳は...よ 呟ろうカマ4-1
戯けた振りして

さあ揺蕩うように雨流れ
僕らに嵐す花に溺れ
君が褪せないような思い出を
どうか、どうか、どうか 君が溢れないように

波待つ海岸 紅夕差す日
窓に反射して
八月のヴィスビー 潮騒
待ちぼうけ 海風一つで

夏泳いだ花の白さ、宵の雨
流る夜に溺れ 誰も褪せないような花一つ
どうか、どうか、どうか 胸の内側に挿して

ずっとおかしいんだ 生きかっ散えてほしいだけ
ねえるものなんて僕にはもうないけど
何も答えずにないなら言葉一つでも...よ
わからないよ 本当にわからないんだよ

さあ揺蕩うように雨流れ
僕らに嵐す花に溺れ
君が褪せないように書く詩を
どうか、どうか、どうか 今も忘れないように
また一夏が終わって、花一つを胸に抱いて、
流る自蓋の裏で
君が褪せないようにこの詩を
どうか、どうか 君が溢れないように

エミーは無駄という言葉が好きだった。

そして、病的なまでに余白を好んだ。

彼の部屋には充分に物が無かった。

算盤からソファから食卓まで、何もかもが無かった。

ただ部屋の中には小さな机と椅子がぼろりと

置かれていて、傍にアコースティックギターを立て掛けて

あった。そこには、生活には無駄とも言えるほどの

空白が空いていた。

彼は一詩を書くにも余分に紙を使って、

まず下書きを書いた。A5サイズほどのリースリーフに

纏めてから、全く同じ内容を愛用の手帳に書き写していた。

私がいっつか、カフェで見たのもそれだった。

彼の暮らしは決して豊かなものではなかったが、

それでも物を書く紙とインクにだけは金を惜しまなかった。

また、彼の使っていた日記帳、兼ノートには数えられないほどに

付箋が貼り付けられていた。

そのページの大半には白付だけが記されていた。

彼の部屋にはいつでも日記帳のスペアが用意されていて、

何も書かれていない白で埋め尽くされたページを

彼は好んで眺めていた。

この空白こそが想像力の受け皿なのだと、彼は囁いた。

時折、その過去に空けたページへ新たな詩を書き込んで、

少しずつ埋めるように彼は余白を愛した。

5/1

リニョーセンに着く。

この街に来てまだ、彼がこの国を旅した実感など湧かない。

何処にも彼を示すような痕跡は見つからない。

当たり前だ。あの箱が私の元に届くまでに、

じわだけ掛かったのかもわからない。

中世の町の暮らしも保存した野外博物館、

カムウリニョーセンへ行く。至る所に昔の生活を再現した展示が

散りばめられている。古い家々に隣接する森のベンチに
座って、詩の続きを書く。

彼の書くノイズを想像して、一つ一つ詩を綴る。

きっと、彼ならこう表現をする。詩の隙間に情景を

盛り込む。自らを挟むように言葉の棘を作る。

最低限の押韻を重ねて、過去や身体験を入れ込む。

どうでも……という口癖。夏への憧憬。理想への渴望。

一人称は必ず「僕」を使った。きっと、彼ならこう歌詞を書く。

この場所で、あの頃を思い出しながら。

わかっている。加論、私のやっていることは
創作なんかじゃない。ただの模倣だ。

5/15

ストックホルムに着く。

ドロットニグホルム宮殿近くのカフェで食事を摂る。

何も味がない。

一日は呆気ないほどに短い、ただ生きるにも長い。

あの頃の私は、いつも何かに急かされるような心地で
生きていた。一日が過ぎる毎に焦燥感が募った。

何を為す訳でもなくただ生きている自分から、少しずつ
殻が剥がれていく。その殻はきっと可能性や、素質や、
時間といった類で出来ていて、何層にも重なった

殻の内側の、その更に奥に、何も無い私がいる。

人生にはきっと、賞味期限がある。

私が彼に、昔漏した言葉だった。

5/28 神様のダンス

忘れるなんて酷いだろ 幸せになんてなるものか
色んな何かを咲いた 君のいた夏に咲いた

人に笑わねたくないから 怯えるように下を向く
心より大事な何かが あってたまるものか

暮れない夕に苦追いついて 君を染め抜いた
見えないように僕を追っ越して 行かないで

僕たち神様なんて知らん顔 何処までだって行ける
なあ、心まで醜い僕らだ 世界は僕らのものだ

音楽だけでいいんだろ 他人に合わせて歩くなよ
散逸てくたしたのはあんたじゃないか

どうだっていいよ、このまま遠くへ
誰も知らない場所で月明かりを探すのだ

名もない花が綺麗とか どうでも……ことば、かた
君の口癖が感染、てる
喉の真下には君がいる

言葉も生活も愛想も全て捨てて音楽だ
その価値も知らないあんたに わかて堪えるものか

暮れない夕に苦追いついて 僕を染め抜いた
いつか時間が全て追っ抜いて 消えないで

僕たち神様なんて知らん顔 世界の全部が欲しい
なあ心まで醜いあんたの、思い出全部をくねよ
価値観だって自由なら 人を傷付けていいんだろ
散逸なからたのはあんたじゃないか

どうだっていいよ、このまま遠くへ
誰も見てない場所で生きる真似をしているのさ
酷い顔で踊るのさ 胸も痛いまま

神様僕たちなんて知らん顔 何処までだって行ける
なあ、言葉が世界だと言うなら、世界は僕らのものだ

忘れるなんて酷いだろ
幸せになんてなるものかよ
僕を歪めたのはあんたじゃないか

そうだった、僕はこのまま遠くへ
誰も知らない場所で月明かりを探すのだ

✂
思い出だけを置いて消えるくらいなら、私だけ
あの街に置いて行くくらいなら、一緒に
逃げてくれたら、エイミー、私は何処へでも
付いていった。全部捨てられたんだ。
いつか終わりが来ると知、ていても、何も無い
現実よりはましだ。何処か遠くの国で、
音楽のことだ、全部忘れて、食いたって
何とか仕事を見つけて、ボロ屋でもいいから二人で
生活を見つけて、また心を見つけて、
ただ一緒にいてくれたら、それだけで良かった

本当にただ、私はそれだけで

6/15.

がムラスタン。玉石敷きに落ちる雑踏。

エイミーは五月末の日付が記された詩で、

雨上がりのがムラスタンを書くことを示していた。

彼は結局それを詩に書かなかった。

箱に入っていた六月日付の手紙は、

別のことを謳った詩だけ。

私はその理由が知りたい。

6/16

いつか彼が、私の詩を読んで零けた言葉を覚えている。
嫉妬するよと、彼はそう言った。

私は優しい冗談だと思って、笑った。

6/18

中雨は降らない。

6/20

雨は降らない

6/22

あの公共施設へ向かう途中の、
小さな病院に入っていく彼を見かけたのも、
こんな晴々の日だった。

6/25

雨が降る気配はない。することもないので、
ガムラスタンを通る。小さな島の中は入り組んだ
迷路のようで、大通りには観光客が溢れる。

裏通りに上裸の少年がいた。
流石にこの暑さは活発な子供も堪えるらしい。
走る子供の後を何となく歩いて追う。

少年は時折振り返るようにして私を見て、
誘うように手を振った。

ドロット=マホルム宮殿へと近付いているのがわかる。
狭い路地を抜け、角を曲がる。通り脇の小さな門を
通って、何処かの敷地へと少年は入っていく。
入り口に刻まれた文字は読めない。

後に続いて門を潜ると、静かな裏庭のような
場所に出た。誰もいない。

少年はいつの間にか、消えていた。

敷地の隅に植えられた一本の木の隣に、
四角い鉄の台座が据えられていた。

その上には小さなベンチが置かれ、更にそこへ
集るようにして、小さな少年の像が座っている。

昼下がりを少し過ぎ、雲が伸び伸びと遊ぶ始める。
微かに雨の匂いがしている。

6/25

彼の後ろを付いてまわった私の、彼は心

呆れていたのかもしない。

今となっては彼の気持ちも、伝えたかったもの、

私には何もわからない。

駅から離れた場所にある施設の公共広間には、

小柄なアップライトピアノが置かれていて、

私とエイミーは雨の日になるとよくそれを弾きに行った。

元々人気の無い施設だったが雨とかなれば

言うまでもなく静かで、打鍵の音や、ペダルの擦れる音まで
聞くことが出来た。

貸し切られたように閑散とした空間の中、

自然のホールリバーブが掛かる、雨音のような

リストを彼は鳴らした。

彼のように本格的に音楽へ打ち込む人達からすれば、
私の弾くピアノなど見戯に近いものだったと思う。

それでも私が鍵盤を弾くたび、彼は大層な喜びを示した。

一つ鳴らせばエイミーは口を開くことはなく、緩く目を閉じ、

海中を遊泳するように深く呼吸した。私がどれだけ遠く

演奏しても、弾き終わると彼は必ず小さな拍手をした。

その瞬間だけ、いつも私はコンサートホールで演奏を

したかのような心地になった。

彼の中には音楽への否定の言葉など存在しなかった。
稚拙であつても音を鳴らしたという事実は、愚直なまでに
大切にしていた。

私が上手く行つたと感じる箇所も彼は見通すように褒めた。

私のどんなミスタッチですら丁寧に包み、巨匠の半遊びかの
ように扱った。

彼は音楽への愛情を、そのまま体現するように生きていた。

そして、ある時を境に、彼はピアノを弾くことを辞めた。

6/29

雨が止んだ。

6/30 雨晴る

やっと雨が降ったんだ
この青をずっと思っていたんだ
心臓の音が澄んでいた
言葉以外何にもいらない空だ

あの日まで僕は眠っていたんだ
言の詩ばかりで足が止まなかった
想像よりずっと君がいた街の青さも ずっと

歌え 人生は君だ
ずっと君だ 全部君だ 藍の色だ
言葉になろうと残った思い出だけが 遠い群青を染めた
もっと書きたい ずっと冷めない 愛の歌を
君のいない夏がまた来る

やっと雨が上がったんだ
この街をずっと君が描いたんだ
心臓の音が澄んでいた
あの日からずっと君が待っている
何も言わない 僕が笑っている。誤魔化すように

消える 全部消える
声も言葉も愛の歌も
この目を覆った淡い群青の中で 白いカーテンが揺れる
もっと触れた... ずっと触れた... 愛の歌を
君のいない夏の青さも

白いカーテンが揺れた
もっと揺れた 僕に揺れた 愛に触れた
言葉になろうと残っていた君の詩は
あの憧憬は消えない もっと消せない
ずっと褪せない 無言の語の色だ

歌え 人生は君だ

全部君だ ずっと消えない愛の色だ
この目を覆った淡い群青の色だ
思い出するように揺れた
もっと書きたい ずっと冷めない 愛の歌を
君のいない夏がまた来る

7/2

街を出る。

7/5

ゴットランド島へ向かうフェリーの中ボートの老婆がいた。
杖をつき段差を登ろうとするのを見兼ねて手を貸すと。
彼女は"Thank"と、そう言った。彼女は私がこの国の
言葉をあまり喋れないことに気付いていたらしく、
ニコニコと笑いかけながら何かを喋り続けた。
私が答えに窮していると、彼女は持っていた
黒のボーチから写真を取り出した。
写真には少し融けた老女と老齢の男性を
囲むようにして談笑する、三人の男女が写っていた。

人の名前であらう単語を三つ、老婆は中、くりと口にする。
彼らは今、何処で何をしているのだと思うながら、
私は頷く。

7/6.

ブットランド島、ウイスビー。

聞いた通り、美しい街だと、そう思った。

通りには薔薇の花が咲き、街の至る所には

古い遺跡が残る。

またかつて盛んであった牧羊の名残を

示すように、幾つもの羊の彫像が街に散らばっている。

田舎のように街を覆う輪壁から続く、

転がるような坂道が、そのまま

海へと繋がる薔薇と遺跡の街。

7/8 歩く

今日、死んでいくような そんな感覚があった
ただ明日を待って 流る季節を見下ろした

どうせならって思うよ もう随分遠くに来た
何も知らない振りには終わりにしよう

確かめるように石畳を歩いた
俯きながら行く 何も見えないように

君の旅した街を歩く 訊きもないのに口を出てく
昨日まで僕は眠ってた
何も知らずにただ生きていたんだ
それだけなんだ

今日、生きてるような そんな錯覚があった
妄想でもいいんだ 君が居てくれたらいいや

悲いような歌ばかり書く
頼を伝え花緑青
本当は全部を知っているんだ

夏の終わりだった 流れる雲を読んで
顔上げながら行く街は思い出の中

君の言葉を食べて動く 僕の口には何が見える
今でもこの眼は眠ってる
何も見えずにただ君を見てる 俯くように

あの丘の前に君がいる
その向こうには何が見える
言葉ばかりが口を伝う
何も知らないまま生きていたんだ
それだけなんだ

今でも、エイミー

私が詩を書くことを辞めたいと露したとき、
 エイミーがくちた言葉を私は今でも覚えている。
 「例えば才能というものが一つの糸のような何かだとする。」
 彼はそういった時、いつでも私を勇気づけるように、
 目を合わせるようにして話した。
 その糸は細く、吹けば揺れ、千切れそうなほどに
 頼りなく、薄く、僕たちの日々の暮らしの中で
 いつも目の前に垂れ下がっている。
 その癖、ふとその気になって掴んでみると
 見離すように切れる。糸は裏切らないという
 言葉があるけど、才能は裏切る。
 簡単に君の手を擦り抜けていく。
 でもエルマ、僕は才能を信じていないんだよ。
 人が垂らし、縫うと掴むその糸は
 空想の中にしか存在しない糸なんだ。

理想を押しつけ、己を納得させるための、
 諦めから見えるようになる糸だ。
 本来、どんなものにだってそれなりの価値がある。
 汚れたキャンパスにすら美しさは存在する。

路傍の花にも、不規則に入り乱れただけの
 曲線にも、泥水にも、折れた鉛筆の芯にさえも、
 価値を与える人がいればそこに必ず美しさはある。
 ようはそれを見出す、瞳だよ。
 何だっていいんだ。
 人の産み出す全ての価値は平等だ。
 才能なんて概念は、
 本当はここにはないんだよ、エルマ。

わからないよエイミー。

7/10

街から少し離れた場所を散歩する。
 森を抜けて、背の高い崖際に辿り着く。
 露出した岩肌の先端に立つ。
 遠くにヴィスビーの街が見える。

遠く陸地からやってくる船が、船着場へと
 吸い込まれていく。

7/12

アレクサールの公園から北上して。
 輪壁沿いの海岸線。その輪壁内側は
 豊かな緑に囲まれた自然公園が広がる。
 その北側で、輪壁を模して作られたベンチを見た。
 遠目には寄り添う二つの家にも見える。小さな家と、大きな家。
 その間を結ぶようになだらかな坂道が繋がられている。
 輪壁のすぐ向こう側には夕暮れが広がっていた。
 夜混じるような夕暮れ。
 遠くから、定時を打つ教会の鐘の音が聞こえている。

私が例の施設広間へ行くと、彼は珍しくピアノを弾いていた。

触れるようなタッチで黒鍵を鳴らしている。

ペダルを押し付ける音が聞こえる。細やかな休憩を挟んで指が踊る。

私が物珍しげに見ていると、彼はこちらに氣付いて、苦笑いしながら席を立た。夏の広間は雨上がりの湿った空気が流れていて、厚い壁のガラス越しに蝉の音が聞こえた。

もう君の方が上々になったからねと、彼は笑う。

私は口に出してそれを否定する。

彼がピアノを弾かなくなってから、随分と経っていた。

彼は私をピアノの前に座らせながら、最近よく考えるんだけどと話始めた。

僕たちは何処から音楽を見つけたんだらうね。私は首を傾げる。

彼は腕を伸ばして、人差し指で鍵盤を押す。

現代音楽、クラシックを遡って、バロック、ルネッサンス音楽も通る。その原型を辿れば、例えば声だけの音楽、

聖歌に辿り着く。辺境の民族音楽も同じだらう。

楽器が作られる前には人々は声で音楽をしていたんだよ。

聴きながら、私は相槌を打つ。

彼の目は深い夜の色をしている。仄暗い夜の色。

ならそれより前は？

彼は話す。

人間が声を持つ前は、例えば僕たちが動物だった頃とか。鳴き声も聞きようによっては歌に聞こえるから、

音楽の範疇かもしれない。その前は？

例えばプラクトンのような何かだったとして。彼らは歌えない

だらうね。でも音は出せる。僕たちは音さえ鳴れば音楽と表現するだらう？

打楽器や、拍手のリズム、その音を音楽と呼ぶなら、

プラクトンが泳いだ拍子に鳴る小さな音も

音楽に成り得る。

じゃあその前は？

宇宙が始まる前、僕たちが何も無かった頃の話だよ。

無だ。全くの無音だ。

それは音楽に成り得るのかな。

なるんだよ。

僕たちの音楽にも休符があるだろう。

その瞬間だけを切り取ってもそれは音楽のままだ。

全くの無音を芸術作品だと言う輩がいてもおかしくない。

僕の価値観においては、本当の静けさを

音楽だと言われたら、たぶん納得する。

昔、芸術の神様の話をしたぞ。

作品の価値を決める神様の話だよ。

僕たちの音楽の価値も、きっとその神様が決めている。

彼が彼女かはわからないけど、神様って言うくらいだから
きっと何処までも公平だ。

全ての音楽にも価値を付けてくれる。

それこそアランツトンの奏でるメロディにも、本当の無音を

象った作品にするも。

なら、僕たちの音楽って何なんだろうね。

人生を音楽に捧げたとして。

僕の人生の価値は、何処にあるんだろう。

私はよくわからないまま、彼の顔を見上げている。

彼はピアノの縁を優しく叩いて、何でもないよ、と言う。

彼が微笑んだので、私は少し安心する。

今日は何を弾く? と私は聞く。

彼は手を振って鐘を鳴らす野草をする。

フライングリストだ。バカニーニの主題を元にした技巧曲。

私は黒鍵に指を置く。

彼はピアノに置いた指でカウントを取る。

その日を最後に、彼は街から姿を消す。

9/6 心に穴が空いた

小さな穴が空いた この胸の中心に一つ
夕陽の街を塗った 夜鈴の夕暮れ

忘れたいのだ 忘れたいのだ
忘れたい脳裏を埋め切った青空に君を描き出すだけ

だから心に穴が空いた 埋めるように鼓動が鳴った
君への言葉も口を開けば 大体言い訳だった

だから心に穴が空いた 降り雨だけ温いと思った
繕って 繕って 繕って 顔のない自分だけ

少しずつ穴の開いた木漏れ日の、森で眠るように
深海みたいに深く
もっと微睡むように深く、深く、深く
深く夜を纏った目の奥に自明かりを見るまで

君の心に穴を開けた 音楽が何だ、と言うんだ
ただ口を開け
黙ったままなんて一生報われないよ

忘れたいことが多くなって 諦めばかり口に出して
躓いて、躓いて、転がって、土の冷たさだけ

君の人生になりたい、僕の、人生を書きたい
君の残した詩のせいだ 全部音楽のせいだ

君の口調を真似した 君の生きた模した
何も残らないほどに 僕を消し飛ばすほどに残ってる

心の穴の奥に棲んだ 君の言葉に紐リ付いた
でも違うんだよ、もう

さよならだなんて 一生聞きたくないよ
忘れたいことが多くなって これから僕だけ年老いて
冷め切って、冷め切って

僕の心に穴が開いた
君の言葉で穴が開いた 今ならわかるよ
「君だけが僕の音楽」なんだよ、エイミー

だから心に穴が空いた その向こう側に君が棲んだ
ながって ながって ながって 戻らない穴だけ

穴の空いた僕だけ

7/18

私は強欲だから全てが欲しい。地位の先に
名誉があるように、作品の先に評価が欲しい。

貴方みたいに、芸術のことだけを考へて物が書けない。

ヘンリー・ダーガーになんてなれる気がしない。

足りない。何かかき足りないんだよ、エイミー。

この胸に空く余白を埋める何かが必要。

それを埋めるためだけに名声が必要。

自分以外の何かになりたい。

7/20

輪壁沿いのベンチで、落ちない夕日を見る。

白夜が続いている。明日には街を出る。

7/22

ウイスキーを出てフォレストンへ向かう途中。

森に囲まれた田舎道の教会で、あの時の老婆に出会った。

彼女は私を見て驚いた顔をしたが、

すぐに笑顔を見せた。

教会の敷地には等間隔に何か並んでいた。

様々な材で作られた、墓石の群れ。

墓地だと、すぐにわかった。

彼女が林を歩き始めたので牛を貸すと、

教会左牛にある墓石の一つの前で止まった。

跪き、花と蝋燭を添えると、彼女は目を閉じ祈った。

とても静かな昼下がりだった。

水面を打つさざ波のような風が吹いて、

オークの木に鳥が止まっては鳴いた。

彼女は顔を上げてこちらを向くと、

"man"と言って、微笑んだ。フェリーで彼女が

取り出した写真に写っていた、老齢の男性の姿が
フラッシュバックする。それが夫を指す言葉だと、

私にもすぐにわかった。

何かを喋っているのが聞こえる。

あの日から全てがぼやけて見える。全てが歪んで聞こえる。

まるで私だけ湖の底に取り残されているみたい。

老婆は黒いボートからハンカチを取り出して、

黙ったままの私に差し出す。

私は何も言わず、ただ俯いている。

祖母から連絡があったので帰省した。山間は色を変えて、
秋も深く着た頃だった。家に何か妙なものが届いていると、
祖母はそう言っていた。顔を見せるっいでだと思った。
特に心当たりもなかったが、どうやら遠くの国から
郵送されて来たものらしい。それが妙に気に掛かっていた。

駅から出た先、祖母の家へと向かう途中のカフェテラスは
今はもう無くなっていて、代わりに何か
施設の建設が進んでいた。

家へ着くと、祖母はよく来たねと笑ってから、紙に包まれた
郵便物を差し出した。角ばった長方形の何か。
包みを破って中から出て来たのは、少し薄汚れた、
妙な木箱だった。
蓋を開けて、彼の、エイミーの遺した手紙を読む。

あの日から私の瞳はずっと夢を見ている。

7/24

フォレスブドの船着場から、船に乗ってフォレ島へ。
島では今でも原始的な牧羊が行われている。
至る所に風車を見る。

箱に入られていたのは、数十枚の半紙と詩と、
五線譜に書かれた音符、何処か異国の写真。

筆跡は間違はなく、懐かしい彼のものだった。

食い入るやうに中の半紙を読んだ。彼は北欧の一国へと

旅に出ている。数ヶ月をかけて南の古都リンドリンシェーペン、

首都ストックホルムを回り、中世の街カムラスタンに滞在し、

ブットランド島、フォール島へ。そして、最後はストックホルムへと戻り、

全てを終えるのだと。

彼が半紙に書いていた内容を語る術を私は持たない。

擦り切れるほど読み返しても、彼が伝えたかったものの

真の価値を私が理解することなんて出来ない。

私には何もわからない。ずっと、彼の後を追って回ることしか

しなかった私には、今更自分で物を感じることも出来ない。

今も彼を真似るように、彼の旅した街を巡る。

彼がしたやうに某処で詩を書く。

何も変わっていない。何も思ふ浮かばない。

7/27

フォール島の北端へ。奇岩群を見た。

見渡す限り石灰岩の砂浜。至る所に数メートルの

巨大な岩が屹立している。

エミーが写真に撮っていたのはその中でも一際目立ち、

岩の群れから離れ、寂しげに聳え立つ岩だった。

7/28 声

どうしたって触れない どうやっても姿を見せない
簡単に忘れるくせに もうちょっとだけ覚えていた

この歌の在り処を

わからないから言葉のずと向こうで
この喉を通るさよなら呑み込んで 笑っている
朝焼け空、唇痛..ほど噛んで
虚しさは全部今日のものだ
わかっているけれど わかっているけれど

話すとき顔を出す
出てきたってすぐに消えてく
泣くときに溢れる
黙ったって喉の奥にいる、神様の話

描きた..のは 心に空いた時間だ
言葉よりずと重い人生はマシンガン
さよならの形をただ埋められなくて零して
僕は昨日も今日もここで座っているばかり
笑っているばかり

わからないから言葉のずと向こうで
この喉を通るさよなら呑み込んで
眠っている
朝焼け空、唇痛..ほど噛んだ
貴方の世界を今日も知らない
私がいるばかり 笑っているばかり

7/30

夢を見た。

舗装もされていない田舎道を、彼は一人で歩いている。

途方もなく長い道の先に、あの森の教会が見える。

私は彼を追いかけるように歩く。数え切れないほど歩いて、

漸く私は連は門を踏む。教会の左手には百日紅の木が立っている。

赤い花が小さな爆弾のように散っていく。

彼は正面の扉を開けて、中へ入る。

私はすぐに彼を追う。

ぼんやりと目が眩んで、私は海辺にいる。

何か大切なことを考えていた、そんな気がする。

月明かりに照らされる海の表面に、

赤い百日紅の花が浮いている。

そうだ、私は人形を造らなければいけない。

人形は牛頃な大きさを、成る可く様になっているものが良い。

私は形の良い作品を造らなければいけない。

砂浜から濡れた砂を汲み上げて、手の先で人の形を

造っていく。胴を囲み、腕を成形し、足を取り付ける。

しかし砂では耐久性に欠けるのか、造った先から崩れていく。私は早くそれを造らなければいけないのに。

苛立ちから砂を握る指に力が籠る。私は彼の顔をした人形を造っている。ずっと、ずっと。

そうしているうちに、ふと頭の隅で、これは夢だと
思い当たる瞬間を迎える。

この夢の先を私は知っている。

顔を上げると、私は雨の滴るカフェテラスにいる。

8/2

フォレ島から戻る。

船着場近くのレストランで食事を摂る。

変わらず、何も味がない。

X

エイミーがあの日、私を置いていなくなったときのことを覚えている。
その時の自分の心持も。

彼を探し、涙を流し、頭の中で空いた穴の大きさ、虚しさ、
胸を掻き毟るような苦しさに関われながらも、

心の奥底には別の感情が隠れていた。

私は少し安堵していた。

彼が隠していた病気のことも、そう長くはないであろう
身体のこと本当は気付いていた。

私は逃げ果せたのだ。

彼の優しさによって。彼が目前でふと消えてしまう、
その終わりの瞬間から逃げられたのだ。

きっと、私はそこから何も進めていない。

彼が街から消えたあの日から。

い、私を連れて行ってくれればと思ったことも本当だった。

それでも、その奥にはいつでも恐れが隠れていた。目を背ける、

醜い私が隠れていた。彼はきっとそれを知っていたのだ。

全て、臆病な私の所為だ。

私は変わっていない。彼の残したものに縋り、自分で歩くことを
辞めたこの心は、ただ虚しさばかり肥大していく。

岩屋を抜け出せなくなった。かの山椒魚のように、

それが酷くつかえている。

私は何も変わっていない。

彼の部屋から盗んだこの日記帳ばかり大切に抱えて。

あの日から私の瞳はずと、夢を見ている。

8/7

ヴィスビーに戻ると、街は人に溢れていた。

通りを歩く人に聞くと、中世週間に入、たのだと言う。

古き伝統を尊び、人々も街もあの頃に戻る祭りしているのだと。

頭巾を被った民族衣装の女性、騎士の装いをした青年から、

中世の海賊、バイキングに扮した人まで。

至る所に出店が並び、狭い路地まで人が詰めかけている。

街は活気に溢れ、祭りの様相を見せていた。

人混みの中で、音楽を聴いた。

民族楽器の笛の音色、コントラバス、そして、フィドルのような

弦楽器が鳴るのが聞き取れる。アイルランド音階に

似て、違っメロディ。

広間に出ると三拍子を鳴らす楽団に合わせて、

手を取り合い踊る人々が見えた。

彼もこの祭りを見たのだらうかと、ほんやり考えた。

8/10

アルメダールの公園。小さな鳥が眼前を歩く。

この国にも雀がいるのか。植木に囲まれた椅子に座って、

考え込む。筆が進まない理由にふと行き当たる。

書くことがない。

何も浮かばない。

8/15

雨が降った。輪壁に作られた見張り台の中で雨宿りをする。
数階/分ほどの階段を登って下を見ると、あの奇妙な。

塔を模したバンチが見えた。

もう/彼との思い出も/尽きていた。私には/何も書けない。

8/21

/何も書けない。

8/22

ホテルのキッチンで、パンをスライスして食べる。

彼は料理が苦手だった。家事不精だったと

言ってもいいかもしれない。

よく、二人でこんな風に、雑にパンを切って。

8/23

何も浮かばない。

8/25

~~何~~ ~~何~~

何も書けない。

8/26

書けない。

8/27

街を出て、北へ向かった。

舗装もされていない道を、私は一人で歩いた。

頭の中には空白があった。真白な、湿じり気のない
ペッキで塗りたくったような、空白。

彼の好きだった余白の色。

地面に足が引、付いたようにつかえて、何度か転びかけた。

旅の間ずっと履いた靴はもう擦り切れかけていた。

田舎道を抜けて、疎らに見える民家を超えて、

あの森の教会へと向かった。

正午を過ぎて、乾くような日差しが照り付けた。

人生の価値という言葉ばかりが頭を巡っていた。

ふとした拍子に足がもつれて、硬い土の上に転がった。

夏も終わりに近づいた。浅い藍色が視界に入った。

その時だった。

朦朧として顔を上げた先、

木々の隙間に、私は確かに彼の影を見た。

足の痛みは消えていた。茂みをかき分け、獣道に足を
取られるようにして走った。息苦しさなどもう無かった。

心臓の音だて聞こえなかった。海の音が近く聞こえる。

優しいさざ波の音。彼の好きだった音。遠く向こう側で、

誘うように影が揺れる。何度か足をもつれさせて、

漸く森の終わりが見えた。転がり込むようにして、

茂みから抜け出す。

なみ海岸線と、そして砂浜が広がっている。

私は顔を上げる。

人気のないうみのかげで、

毛並みの美しい雄鹿が私を見ていた。

砂浜沿いに、一つの桟橋が見えた。

歩み止まる雄鹿を尻目に、ただぼんやりと

導かれるように足が進んだ。

「終わりのない小説なんてものは語まらない。」

「ただらと情性で続く物語は美しい。」

「人の価値は、終わり方にある。」

私を支えて来たものは最後まで、彼の言葉だった。

棧橋の先端に立て、下を見た。さざ波のバルト海は、

何処までも深く青く、優しい夜の色をしていた。

靴を脱ぐ。旅の数ヶ月を思い返す。

彼も、こんな気持ちだったんだろうか。

ただそう思いながら、私は棧橋を飛んだ。

思ったよりも簡単に体は沈んだ。泡の塊が顔に纏わりついた。

海拔0mを越えて視界が不鮮明に変わっていく。

棧橋の隙間から漏れ出た日光が、月明かりのように

海中へと挿して、綺麗だと、そう思った。

エイミー。彼の言葉が頭の中を通っていく。

ぼやけた視界の端で何かが光っていた。

泥の中に、何かが埋まっていた。

手を伸ばして掴み取る。私はこれを知っている。

私はこの万年筆を知っている。

8/27

棧橋近くの砂浜にインク瓶が転がっていた。
そこから少し離れた岩陰で、彼の靴を見つけた。

靴の中には手帳が入っていた。

彼のいつも使っていたそれだ。

私が彼の部屋から持ち出したこのスベアではなく、

彼がずっと持っていた本当の。

私はずっと彼の残した手紙を追うように旅してきた。

あの手紙だけが私の支えだった。私も動かす、

謂わばガソリンのようなものだった。

彼はいつでも彼の決めた万年筆とインクを持ち歩いていた。

私は万年筆に明るくないが、彼を真似て

使うようになってわかった。普通に言えば

早々簡単にインクは無くなる。

尋常でない数を書いていたにして、減りはそんなに

早いものなんだろうか。

彼はいつも下書きを書いてからあの手帳に写していた。

私に送られたあの手紙が「下書き」だったとするなら、
この手帳が。この手帳こそ、彼の本当の。

潮風に痛んだそれが目の前にあった。
私は表紙を開いて、彼の残したものを読む。

X

何かになりたい。私以外の誰かに。

見下されない自分が、他人の悪意に負けない自分が欲しい。

苦しい。何も言い返せない私が、私はこんな私が嫌いだ。

エイミー、貴方が言ったこと全部覚えてる。

忘れられないよ。あの日から私の日は変わ、たんだ。

一言一句違わず書ける、ほんとうだ。覚えてるんだ。

「それなら、君はエルマだ。」

今から君はエルマだよ。

辛いことなんて何もない。泣き虫で、臆病な癖に

曲げない自分を持っていて、詩を書くことが得意な、

ただのエルマだ。僕のことだって、好きに呼んだらいい。

頭字だけ被せて、エイミーなんてのもいいね。

昔、そういう詩人がいたんだよ。

君の指先には神様がいます。誰一人見えない。

今は僕たちしか知らない。小さな神様だ。

君の価値を君は知らない。他の誰かも、

君を馬鹿にする奴等も、友達も、両親も、君の祖母も、

勿論僕だって知らない。

ただその神様だけが君を知っている。

芸術の神様だけが本当の君を見てる。

エルマ、君のしたいことは何だ？

君が本当に見つけたいことは。

エイミー、私は

✕
エイミーの手帳は、潮風で所々読めなくなっているものの、
殆ど手紙とは変わらない内容がそこには書かれていた。

ただ最後の数ページ、そこだけは違った。

そこには手紙には無かった詩が数編、挟まっていた。

雨上がりの晴れを書いた詩。冬に眠り、夏を待つ詩。

自ら負け犬と標榜する詩。日付は疎らで、

後に書かれたものは所々掠れ、薄く、

それでも凍りて並んでいる。

最後のページを捲る。

8/31の日付、きっと彼がその旅を終える

直前に、残ったインクで書いたものだ。

余白に詰め込まれるように

書かれた詩の題は「エルマ」。

彼がくれた、私の名前だ。

9/16 エイミー

口に出してもう一回 ギターを鳴らしてニ拍
歌詞を書いてもう三節 四度目の夏が来る

誤解ばかり、手遅れみたいな話が一つ
頭の六畳間、君と暮らす僕がいる

忘れないこと、わからないことも僕らのものだ
長い夜の終わりを信じながら

さあ人生全部が馬鹿みたいなのに
流れる白い雲でもう
想像力が君をなぞっている
あの夏にずっと君がいる

生き急いで数十年 許せないことばかり
歌詞に書いた人生観すら ただの文字になる

言葉だって消耗品 思い出は底がある
何かに待ち惚け、百日紅の花が咲く

このまま、ほら
このまま、何処か遠くの国で浅い夏の
隙間を彷徨いながら

さあ人生全部で君を書いたのに、忘れぬ口癖のよう
想像力が紙をなぞっている
指先にずっと君がいる

もういいよ

さあもういいかい、この歌で最後だから
何も言わないままでも
人生なんて終わるものなのさ
いいから歌え、もう

さあ人生全部が馬鹿みたいなのに
流れる白い雲でもう
想像力が僕をなぞっている
あの夏にずっと君がいる

「この世で一番美しい音楽が何処にあるかわかるかい？」

私にわからないと答えると、彼は私の頭を
掴んで優しく揺すった。頭？と私は聞く。

彼は頷く。

「バットもベートーヴェンも超えられない音楽が

そこにある。君だけじゃない、誰の頭にだってある。

可能性という言葉に、今この世にある全ての音楽は叶わない。」

彼の瞳は優しい夜のような深さがある。

「今、君は想像力という名前前の海の中にいる。」

私は想像する。

「自由に息は出来ないかもしれないけれど、泳ぐための
腕が付いている。下を見ればすぐ其処は海底だ。

大きな大きな、言葉の砂漠が広がる。

その砂に紛れて、大小様々な石が転がり隠れている。

君はそこから、自分の思う宝石を取り出す方法を

学ぶんだよ、エルマ。」

私はその美しさが、神様の居場所が知りたかったんだ。

貴方の教えてくれた、作品にだけ宿る神様の。

貴方の見ていたその景色を。

どうして忘れていたんだろう。

どうして私は、ちゃんと考えてこなかったんだろう。

この頭で、貴方の教えてくれたこの瞳で。

エイミー、どうしてこんなに、エイミー、私は

1-4 ラス

時計が鳴ったから やっと眼を覚ました
昨日の風邪がちょっと嘘みだった
出かけようにも、あゝ、予報が雨模様だ
どうせ出ないのは夜が明けなから

喉が渇くとか、心が痛いとか人間の全部が邪魔してるんだよ
さよならの速さで顔を上げて
いつかやっと夜が明けたら

もう目を覚まして。見て。
寝ぼけまなこの君を何度だって描いているから

傘を出してやっと外に出てみようと思ったは……けど、
靴を捨てたんだっけ
裸足のままなんて度胸もある訳がないや
どうでも……かな 何かしたってんだろ

夕飯はどうしよう 晴れたら外に出よう
人間なんてさ見たくもないけど

このままの速さで今日を泳いで
君にやっと手が触れたら

もう目を覚まして。見て。
寝ぼけまなこの君を忘れたいって覚えているから

丘の前には君がいて随分久しいわって、
笑いながら顔を寄せて
さあ、二人で行こうって言うんだ

アップランドの納屋の下 ガムラスタニの古通り
夏草が邪魔をする

このままの速さで今日を泳いで
君にやっと手が触れたら

もう目を覚まして。見て。
君を忘れた僕を

さよならの速さで顔を上げて
いつかやっと夜が明けたら

もう目を覚まして。見て。
寝ぼけまなこの君を何度だって描いているから

9/3

宿に戻る。日記帳の余白に詩を書き付ける。
在りし日の彼がそうしていたように。

題は 雨とカーン。

✕
エイミーはいつでも優しく笑っていた。

彼の部屋に行くと決まってギターを弾いて。

彼の作った歌を聞かせてくれた。

エイミーの詩は何処か懐かしい匂いかった。

晩夏の青空みたいに深い色が見えた。

それでも何処か排他的で、拒絶的で、

彼を包む殻のような自尊心が

垣間見えて、私はそれから少し、嬉しかった。

9/5

サンタマリア大聖堂から東へ登る階段。

丘の上のベンチ。詩を書く。

題は、憂一集。

エイミーは無駄という言葉が好きだった。

私がピアノを弾きながら、悪戯心から譜面にはない

動きを仕掛けると、決まって笑顔を見せてくれた。

それは愛すべき無駄だよ、エルマ。

極めて原始的な作曲風景だ。

往年のジャズナンバーも、ロックンロールも。

その譜面にはない無駄から生まれてきたんだ。

9/6

詩を書く。題は、心に穴が空いた。

本を読むことは大事だよ。

創作の源泉はいつだって言葉の中にある。

エッセイ、本は言葉で出来てる。

その手にある本だって、今、芸術の神様が読んでるかもしれない。

9/7

言葉が溢れる。頭の中を音符が踊る。

思い出が巡る。書き足りない。

手帳の空いたページに次から次へと、

過去の日付の合間にさえずり、彼の思い出を書き連ねる。

どうして忘れていたんだろう。エイミー、私はどうして、こんなに、

八月だった。まだ少し暑が残る街に
花火が上がった。風一つない夕風の空だった。

エイミーはギターを爪弾く手を止めて、
ベランダへ出る窓を開けた。

エルマ、花火だ。彼は言う。

私は詩を書く手を止めて、外に出る。

背の高い建物に隠れて、ベランダから見える

花火は半円のように途切れていて。

エイミーは優しく笑っている。

9/8

あの海辺へもう一度向かった。

砂浜を散策した先で、もう一つの古びた桟橋を見つけた。

私が飛んだそれと映し鏡のように似て、

少し違うような朽ちかけた橋。

彼のギターケースは、其処で野晒しのまま横たわっていた。

ケースの中にはアコースティックギターと、

詩が認められた一枚の紙。

題はノーチラス。

僕は君のピアノも、詩も好きだよ、エルマ。

そんな顔をしたう駄目だ。

いつか君は大きくなる。とても良い作品を書く、音楽家になれる。

僕は才能を信じていないけど、音楽は信じてる。

何を言われても聞き流せばいいのさ。

どれだけ拙い作品でも、理解されないようなものでも、

芸術の神様にしかわからない価値がある。

ちゃんと散えただろ。

大事なのは他人の評価じゃない。

音楽だよ、エルマ。



エリマ、優しい人間になりなよ。

9/10

私の中に月明かりなんてない。貴方の見た光は私にはわからない。
ただ、貴方を真似たものを書くために青空が浮かぶ。
詩の向こう側にその顔が見える。

9/10

今まで私には、芸術を肯定したいなんていう
意図はなかった。

私が貴方の跡を追って、旅をしてまで
曲を書く理由は、そこにはなかった。

建前の裏側にはエゴがいる。

全部私のためだったんだ。

本当にそれだけだったんだ、エイミー。

9/11

やっとわかった。

9/12

エイミー、思ったんだ。

私はまず、貴方が残した詩で音楽を書きたい。

生まれて初めてだった。初めてこんなにも、

何かをしたいと思ったんだ。

今まで私は模倣しかしてこなかった。

貴方の真似で詩を書き始めた。その生き方を真似て。

音楽だってそうだった。本当は興味なんて無かった。

ただ、音楽を楽しむ貴方の視点で、その瞳で、

貴方の見た世界を知りたいだけだった。

それでも私は、音楽を辞めた貴方の物語を描きたい。

私が彼の持った思想を引き継がないと、

誰も報われない。私は私の人生で、彼の見た光を

見出さなければならぬ。

誰一人見ていない場所でも、拙くても、

誰の評価も受けないうる在り方だったとしても、

私の、彼のためだけの作品だ。

それでいい。

彼があの日私の中に見た月明かりを探す。永い、永い旅だ。

9/14

日記を書くことも、そろそろ辞める。

終わりのない物語はつまらない。彼の言葉だ。

私の書いたものくらい、私で終わらせたい。

9/25

街の港で船に乗った。

デッキへと登ろうとしてふと船着場を見ると。

敬会で別れたきりだった老婆が見えた。

彼女は息子達や、孫であろう人物に囲まれて、笑っていた。

こちらに気がついたようで、遠くから何かを言っているのがわかった。

近くにいたとして、私にこの国の言葉はわからないかと

思いながら、私は会釈をした。

老婆は私の後ろを指差して、

傍の男性に支えられながら笑った。

デッキを登り切って今、私は船の向こう側を見ている。

彼が夜船いと呼んだ。夜混じる夕焼けの色が、

水に平線を赤く燃やしている。

